

メイドさんと  
ご主人様の



140文字日記

作 ARM1475



## 登場人物

---

### ・ご主人様

..... 28歳。いわゆるイケメン。職業は教師。私立皇南学院の中等部と高等部で美術の教師を務める。

良家の次男で芝浦にある高級マンションで自由気ままに一人暮らしをしていたが、両親から強引に住み込みで身の回りの世話をするメイド（A子）を送りつけられる。

好みは巨乳で顔や性格は二の次。基本、物事にあまりこだわらないサッパリした性格のハズだが何故かA子相手にツッコミが激しい。

A子が来て早々、部屋に隠していたマイ・フェバレット巨乳エロ本を焼き捨てられた事から「**この女は敵**」と認識している様子。

でもゲームの話になると意気投合するので何とか主従関係を維持出来ている。

ゲームが好きでヲタクの域にあるが、だが腕はいまいち。カッとなって壊した携帯ゲーム機は数知れず。

ゲーム好きだがエロゲーは苦手。自室で表情も変えずにエロゲーをプレイするA子に困惑する事もしばしば。

### ・A子

.....本名不明。というか名乗らないのでご主人様も知らないまま。

黒髪のロングヘア。小柄で三白眼、貧乳というか幼児体型。年齢も不詳だが、大学は卒業しているとの事。運転免許証によれば24歳。

才媛で勝ち気な性格。辛辣な口調故に、ご主人様と衝突する事もしばしば。

家事能力は完璧だが、限度を考えない行動が多く、無駄な料理を作ったりして失敗する事も。

体型コンプレックスから巨乳を敵視し、ご主人様の部屋で巨乳のエロ本を見つけてしまった事から「**この男は敵**」と認識している様子。

しかし、ご主人同様ゲーム好きで、ゲームの話になると意気投合する。それ以外でも割と最近では意見があっている様子。本質は実は似たもの同士。

コレクター的な面が強いが“集める”行為が目的である為、入手したゲームに対する執着力は意外にも無い。

その為、遊ばなくなったゲームはネットオークションに良く放出している。

またムツリスケベな性格で、エロゲーにも抵抗なく接する事が出来る。

・ B子

.....突然押しかけてきた謎のメイド。見かけは18歳、でも実際は.....

黒髪のロングヘアで、くるっとした瞳がチャーミング。巨乳で、ソレが原因でA子から敵視されている。

A子のサポートと称してご主人様の家にやってくるが、実は.....。

気まぐれな性格で能天気。メイドとは名ばかりで家事は苦手。

A子以上にスケベな性格で、初対面の日にご主人様を押し倒し、色仕掛けで言いなりにしようとするが、

逆にご主人様の○○に負けてメロメロになってしまう。以後、隙あらばご主人様を口説こうとする困ったちゃん。



## 第103話

---

突如現れた謎の、新たにご主人様のメイド。

しかしご主人様もA子もそんな話は聞いておらず、戸惑うばかりであった。

「私は——」

少女はA子に一瞥をくれ、咳払いをする。

「……お嬢様のサポートとしてやって参りました」

「お嬢様？」

ご主人様ばかりかA子も辺りをキョロキョロ見回す。

「「……誰？」」

すると少女はA子を指す。

「貴女です。我がある……否、お父上からのご命令です」

「おーやーぢー？」

A子は物凄く嫌そうな顔をする。

「お嬢様は確かに何でもこなせる方ですが、限度を知らなかったり、  
ピントの外れた事をしていないか心配しておられました。

そこでこの私が監視役として来ました」

「かんしゃくうう？ 要らんわっそんなの！」

珍しくA子が苛立っていた。

「だいたい、実家から来たって言う割に、私はアンタの事は見覚えがないんだけど？」

「それでもありませんよ。私はお嬢様の事はよく知っています」

少女はニコニコ笑いながら答えた。

「お子様の頃から、ずうっと観てましたから」

「おーこーさーまーあ？」

困惑するA子。本気で覚えがないらしい。

「それとですね、ご主人様の“ご実家”の事も」

「？」

ご主人様も困惑する。

ただ、A子のそれとはやや違うふうに、であったが。

「惚けなくてもいいのですよ。“ご実家”のご職業はその筋には有名な名家ですし。  
今回はそちらからも依頼されています」

「依頼、って……」

「当然じゃないですか、このメイドとして雇われたのですから」

「はあ」

しかしご主人様は釈然としない。

「いずれにせよ、この様子ですと、お父上が危惧なされた通りやりたい放題だったようですね」

そう言うと少女は部屋に上がり込み、中を把握しているように台所に向かって行った。  
。

「ちょ、ちょっと待ちなさい！」

「ほら買いすぎて詰め込んでる」

少女は台所の冷蔵庫を開け、ぎっしりと詰まった中身を見て苦笑いする。

「これでは賞味期限も怪しいですわね」

そう言って少女は次々と中身を取り出し、古いモノと新しいモノを仕分けし始める。

「一体アンタ！」

「B子とお呼び下さい」

「びいこお？」

「私の名前を出すとお嬢様の素性が知られてしまいますよ」

「ぬう…」

「一体これはどうしてモノか……」

ご主人様はマイペースな来訪者をすっかりもてあましていた。

「これは酷い。2／3が賞味期限切れか傷んでます。思い切って捨てましょう」

「ちょっとくらいなら……」

「駄目です」

B子はテキパキと古いモノをゴミ袋に詰めていく。  
その素早い仕事ぶりやA子以上である。

「A子も早いと思ったが、こっちはガチでプロだな」

「仕分けましたが、調味料など足りないモノがあります。買い出しが必要ですね。  
ご主人様、ちょいとお付き合いを」

「へ？ 何で」

「.....いいから」

B子が睨んだ。

笑顔で鋭い眼光を放つ B 子にご主人様は固まった。

「何でご主人様を！？」

「お嬢様は洗濯中なのでは」

「あ」

言われて A 子は振り返る。遠くで洗濯機が回っている音が聞こえていた。

「掃除も途中でしように。大丈夫、取って食ったりしませんから」

そう言ってもう一度微笑んだ。笑ってるのに少し怖い。

## 第 1 1 2 話

---

B子はまだ納得しないA子を留守番させて、ご主人様を引っ張るように買い出しに連れ出した。

B子は近所のスーパーではなく、バスで少し離れた場所にある大型ショッピングモールへ向かう。

まっすぐ地下食料街へ向かうと、B子のご主人様に持たせたカゴへと次々と必要なモノを放り込んでいく。

「こんなものですか」

「そんなに買うもの無かったようだが」

「ご主人様を連れ出す口実です」

「へ？」

「まずはレジで精算を。この後ちょっとお話が」

「はあ……」

言われるままにご主人様は買ったものをレジで支払いし、  
B子とともにショッピングモールを出た。

既に辺りは陽が傾き、西の空に一番星がきらめいていた。

「どこへ連れて行くんだ、バス停はこっちじゃ……」

B子のご主人様を休日のオフィスビルの中へ案内した。

「良く入れるなここ」

「我が主の持ちビルの一つですから」

「我が主？」

「お嬢様のご祖父です。正確にはこのビルは今はお嬢様のお父上のモノですが」

「お父上、って……」

ご主人様は辺りを見回す。

「このビルって確か、国内屈指の資産……」

「ここです」

案内されたのは、オフィスビルの一角にある宿泊所であった。

「何でこんな所へ……」

「質問があります」

「へ？」

ご主人様はようやく、B子の様子が少しおかしい事に気づいた。

そして思わずぞっとした。

どこか殺気めいたものがB子から吹き付けられていた。

「ご主人様はお嬢様とどのような関係ですか？」

「は？」

「どのような、って……」

「単刀直入に言います。——お嬢様と寝ましたか？」

ご主人様、思わず吹き出す。

「なんじゃそりゃ！」

「だから、お嬢様を抱かれましたか？」

B子は押し殺したような声で聞く。

しかしご主人様が溜息を吐き、

「……んな事する訳無いだろ」

「本当ですか」

「あのねえ……」

呆れるご主人様に、更にB子は殺気を吹きかけた。

「.....正直に言って下さい」

「正直に、ねえ」

ご主人様はB子の殺気に物怖じした様子もない。意外と肝の据わった男である。

「じゃあ正直に言おう」

「.....」

**「俺は巨乳が好きだ」**

その一言で、あれほど立ちこめていた殺気が一気に失せる。

「.....は？」

「言っちゃ何だが、アンタんところのお嬢さん、発育がよろしくないなのでその気にもなりません、ハイ！」

ご主人様、大変無礼な回答とともに、B子の豊満な胸を指す。

「アレで24歳というのはJAROへ訴えられても良いレベル」

「JAROって...いつ宣伝したんですかアレ」

ようやくB子も笑い出す。

「あいつの巨乳に対する敵意知ってるだろ」

「え、……ま、まあ」

やはり B 子も承知していたらしい。

しかしここで疑問が生じる。

巨乳に激しい敵意を示す A 子が何故、B 子の事を知らないのか。

ご主人様は既にその事に気づいていたが、まだあえてその事に触れるのを避けていた

。

「兎に角その疑問は杞憂、以上！」

苦笑いするご主人様。

しかし突然、金縛りに遭ってしまう。

薄暗い室内に、爛々と光るB子の目を見てしまった時からだった。

「……口ではいくらでも言えますからね。でも、実際に確かめないと」

B子は困惑するご主人様の顔を指した。

「……一体……何者だアンタ」

「……悪いようにはしませんよ、クスッ」



B子はゆっくりと襟元からボタンを外していく。

上着は滑るように抜け落ち、白い柔肌が薄暗い闇の中で映える。

見た目通りの、白いブラに包み隠されているたわわな胸が少し上下に揺れた。

「ごくり」

「正直ですね」

B子は意地悪そうに笑った。

「こっちのほうも……」

「いや、それはオトコの本能と言うべきか、っていうかチクショウ、  
身体が動かないはずなのに何故そっちは反応するかつ」

「そういう風に暗示を掛けましたから」

B子の手がそこへ伸びる。

ご主人様は動かない四肢の中で唯一たぎるそれが布越しに柔い手の感触を覚え、思わずうめいた。

「あら、立派」

「見、見るなああっ！」

恥ずかしがるご主人様。

剥き出しになったソレに優しく触れるB子の掌の感触が、羞恥心をさらに誘う。

「長い事使っていないから敏感ねえ」

「使っていない言うなっ！」

「結構イケメンなのに勿体ない。何で彼女を作らないの？」

「別にいいだろ、そんな事は！ いい加減止めろっ」

「命令出来る立場じゃないでしょ」

「痛たたたたっ……って擦るなっ！」

「ふふーん。気持ちいいクセに」

「ううっ……何でこんなことに」

「ふふっ、もっと気持ちよくしてあげる」

B子はそう言いきなり頬張った。

ひんやりとする柔い肉が、熱くたぎるソレの表面を冷ますようにぬるりと蠢く。

肉の先になぞられる度、ご主人様の域が荒くなっていく。

「や、やめ——」

「え」

B子はご主人様の手が突然動き、自分の顔を押しつけようとしたので驚いた。

「驚いた。私の術を自力で破りかけるとは——」

B子は再び鋭い眼光をご主人様に浴びせた。

「——」

ご主人様の身体が再び固まる。今度は声も出なくなった。

「意識をもっと深いところに押し込めたわ。

強すぎると人格まで破壊するからギリギリまで押さえたけど——」

B子はふっ、と笑う。

その笑みはとてもではないが好意的には見えなかった。

「お嬢様に害をなす恐れがある者は、

たとえ我が主の命と言えど力づくで排除させてもらうわ」

(こ、この——)

「まだ意識があるの。凄い、並の人間の精神力とは思えない」

さらにB子の目が光った。

(お、墮ち——)

ご主人様は自分の意識が闇の中へ落ちそうな感覚に見舞われる。

「厄介だから、このまま人格破壊しましょうか」

(が——)

すとん、とご主人様は遂に意識を失った。

しかし肉体の一部は未だ反応したままだった。

そんなご主人様を見て、B子は無邪気そうにくすくす笑う。

「このまま精を搾り取って私の傀儡にしましょうか。その方が楽——」

その時だった。

B子はまさか再び、ご主人様が自分の顔を手で押しつけるとは思ってなかった。

ご主人様の自我は完全に抑え込んだはずだった。

自分の意志で身体が動かせるはずもない。

そればかりかご主人様はB子を押し倒し、ゆっくりとベッドの上に立ち上がったのである。

「バカな……私の術が効かないなんてっ！？」

(バカハオマエダ)

「?!」

B子の全身の毛が逆立った。

「何、今の声っ！？」

(思念を直接送ったつもりだけどね)

「女の……声……?!」

B子は辺りを見回す。

しかしその場には自分と、意識を失っているはずのご主人様しかいなかった。

しかもその気を失っている主は、B子を見ながらうっすらと笑みを浮かべていた。

「まさかご主人さ——いやこれは残留思念？」

（もしもの時のために軽い念防御を仕掛けておいたら、  
あの娘じゃなくてイタズラ子猫が引っかかるとはね）

「あ、あんた誰っ？！」

B子は悲鳴のような声で訊く。

しかし動揺するB子でも、直ぐに理解出来たものはあった。

この声の主はご主人様ではない。

そして、自分の術すら無効化にする途方もない力の持ち主であると言う事を。

(イタズラ子猫にはお仕置きしなくちゃね)

ご主人様はゆっくりと右手をB子に向けてかざす。

すると一瞬、その手前の空間が歪み、衝撃波となってB子の身体を突き抜けた。

「あ……」

B子は全身の力が抜けた思いがした。

「何なの……こいつ……この私を霊格で圧倒するなんて！

桁違いすぎる！ とっても人間のものじゃ——」

恐怖するB子の乳房に、正気とは思えぬご主人様の右手が触れた。

次の瞬間、B子は絶叫する。

しかしそれは声にならず、全身の神経を一気に焼かれたような感覚に見舞われた。

\* \* \* \*

次にご主人様が意識を取り戻した時、同時に凄まじい快感を覚えた。

そしていつの間にか全裸になっていた自分の身体の下で、肉感的な若い裸体が汗まみれで紅潮し蠢いていた。

「お、おい」

慌てて離れようとしたが、直ぐに左腕を起き上がったB子が掴んだ。

「ちょ、ちょっと」

「らめえ……やめなひで……」

その焦点を失っていた瞳は完全に快樂におぼれていた。

そしてそのままご主人様を押し倒し、馬乗りになって腰を振り始める。

「ま、まで——」

事態が飲み込めずに驚くご主人様の唇をB子が即座に唇でふさぐ。

「駄目——もってして——術を掛けたのは謝るから！

もっと、もっと私を滅茶苦茶にして、ご主人様ああ」

その甘い喘ぎ声に、若いご主人様の理性はあっけなく弾けた。

「も、もう、どうなっても知らんっ！」

ご主人様はやけくそ気味にB子の背中を引き寄せた。

メイドさんと  
ご主人様の  
140文字日記

ご主人様は目を覚ました。

あれからどれだけの時間が経ったか確かめようとしたが、

巻いていた腕時計の場所さえ思い出せない。

というか、何時の間に全裸になっていたのかすら曖昧であった。

「……今、何時だ」

「結界のせいで通常の間では5分しか経ってません」

ベッドの上で横たわる全裸のB子が答えた。

ご主人様は頭を抱えながら身を起こした。

「.....何でこんなことに」

「悪くはしないと云ったはずですよ」

B子は意地悪そうに微笑む。

そして少し顔を赤らめ、

「.....まさか人如きに、本気で何度もイカされるとは思いもしなかったわ.....不覚」

「あのなあ」

言い切る前にB子をご主人様の口をキスで塞いだ。

## 第123話

---

「……いったい何なんだアンタは」

「ご主人様のメイドのB子で、お嬢様のお目付役」

「そうじゃなくって……」

ご主人様は思わず瞠った。それは一瞬の変貌であった。

「……猫耳に……尻尾お？」

「こう見えても、400年生きてるの」

猫耳に2本の尻尾を生やしたB子は、ニコリ、と微笑む。

「いわゆる、猫又」



疲れた顔でご主人様が帰宅すると、家事を終えた A 子が玄関で仁王立ちで迎えた。

「あの女は？」

「ん？ 隣に……あれ？」

ご主人様は先ほどまで隣を歩いていた B 子がいなくなっている事に驚く。  
しかし直ぐ足下に、一匹の黒猫がいるコトに気づいた。

「ベニじゃないの！」

A 子はその黒猫を知っていた。

「ベニ……」

A子の懐に飛び込む黒猫を観て、ご主人様は何故、彼女がB子と名乗ったのか、ようやく理解した。

「ひょっとして、頭文字？」

ご主人様が呟くように言う。

(たぶらかすつもりがたぶらかされるとは不覚)

ご主人様は突然頭の中にB子の声が聞こえて驚く。

(霊格の高い一族の血は伊達ではないのう)

（お前なあ……）

（猫がしゃべるのはマズイでしょ？）

ご主人様は肩をすくめた。

「あの女、まさか実家からベニ連れ出してきたんじゃないんでしょうねえ」

何も知らない A 子はベニを抱きかかえたまま膨れる。

「彼女、その猫預けて一度帰ったらしい。また来るって」

「来なくていい、ベニは別だけどー」

「ご主人様、仕方ないんでベニ、うちで預かっていいでしょ？」

「……好きにしろ」

ご主人様は流石に同一人物？とは言えなかった。

「……知ーらね」

「？」

「何でもない」

何故か呆れ気味のご主人様にA子は傾げる。

(濟まないね)

そう言ってベニはご主人様にウインクして見せた。

「……この化け猫め」

(お嬢様に手を出していない事は了解した。

若いんだし、あれだけ激しかったのだから色々我慢していたのだろう?)

「そんなんじゃ無ええ」

ご主人様は小声で愚痴る。

(無理するな。……わ、私ならいつでも相手してやるぞ)

「断る。……獣姦は流石にもう」

「何ご主人様？」

「気にするな……」

そして溜息。

「……ところで、黒猫なのになんでベニなんだ？」

ご主人様が不思議そうに訊くと、A子はきょとんとした顔をする。

「ベニで何故色だと」

「いや、普通そうだろ」

「何をバカな事を言うのですか、ご主人様！」

A子はご主人様を睨み付けた。

「ベニと言ったらベニーユキーデでしょうが！」

「そっちかいいい！」

「私がこのベニを初めて見た時、その高い敏捷性にピンと来ました。  
ああ、この子はまさしくベニー・"ザ・ジェット"・ユキーデの生まれ変わりだと！」  
(彼はまだ死んでませんけどね)

ベニは苦笑いしながらテレパシーで突っ込んだ。

「つーか何でその名前を知ってるのかと」

「そんなの一般常識でしょ！」

ご主人様が寝間着でくつろいでいると A 子が怪訝そうな顔でやってきた。

「ご主人様、あの巨乳、すっかり姿見せなくなりましたが」

「んー。A 子のサポートに来たって言ってたなあ」

「ふっ、あのアマ、私に臆したんですよ」

「……」

ご主人様は、どや顔の A 子が抱えているベニを複雑そうな顔で見つめた。

「まあ、実家からベニ連れてきてくれた事は感謝してますが」

「実家で飼っていたのか」

「お祖父様が拾った猫だそうで」

「お祖父様……」

ご主人様は傾げた。

「その、何だ、お祖父様がベニ拾ってきたのはいつ…」

(禁則事項です)

ベニが念で質問を遮った。

「…お前はどこかの未来人か」

(にゃああ)

「……つーかいつまでその姿でいるのか」

(元々こっちが本当の姿)

「…まあ、そうだが」

(それとも何ですか、また私とシたいの?)

言われてご主人様はB子に押し倒された後の事を思い出す。

「……ご主人様」

A子が睨み付ける。

「？」

「何エッチな事考えてんですか」

そう言ってA子のご主人様の股間を指す。

「うわっ！」

ご主人様は慌てて、元気になっている股間を隠した。

「いや、誤解だ！」

「誤解、って……」

A子の顔がっすう険しくなる。

「まさか、ご主人様って……」

そう言ってA子はいきなりベニの前足を掴んで持ち上げ、

「猫に欲情する変態ッ!？」

「違うわっ！いや、ある意味間違っちゃいないけど！」

「間違っていない...だとっ...？」

A子が予想外の回答に息を呑んだ。

「いや、そうじゃなくって！ B子、お前も何とか言えッ！」

(.....)

ベニはわざとらしくソッポを向いていた。

「びいこお？」

A子は獲物を探すような鋭い眼差しを周りにくれた。

「今、あの女、居たんですか？」

「あー、もうっ！」

(あははは)



「ご主人様はソフトコンタクトレンズ使った事ありますか？」

「いや、俺裸眼で普通に見えるから」

「私もですが、ちょっと今日、ネットで気になる話を…」

「何？」

「レンズを乱暴に使っているとたまに、端が欠けてる事があるそうです」

「うわ、痛そうだな」

「問題はその欠けた部分がどこへ行ったか」

A子がそう言った途端、ご主人様の顔が凍り付く。

「……涙と一緒に出るとか」

「自覚が無くても欠けてるそうです。出ていればいいんですが……」

「……抜けたまつげが眼球の裏から出てくるっていう話、思い出した」

ご主人様は身震いする。

「実は眼球って、まぶたとくっついているんですよ」

「出てきたなB子！」

メイド服姿のB子が、ふふん、と得意げに言う。

「従って眼球の裏にまつげも欠片も貯まるような事はありません」

「ま、まあ、ホコリ一つで痛がるくらいだし、普通に考えれば貯まる前に痛くなるわな」

「だいたい、猫の毛玉みたいに貯まる訳……けほん」

咳払いした途端、B子の口から黒い物体が飛び出した。

「ナニソレ」

思わず瞠るA子。

「毛玉...だと...っっ」

「あらあらあら」

B子は吐き出したそれを慌てて掴み、がらっ、と窓を開けて外へ投げ捨てた。

「ナンノコトデショウ？」

B子は愛想笑いを浮かべて翻し、居間から飛び出ていった。

「こらあ！アンタ今、何を捨てたあっ！」

B子を追うA子の後ろでご主人様は呆れた風に肩をすくめた。

「ご主人様、こんなモノ作ってみました」

そう言ってA子は揚げた春巻きに乗った皿を出した。

「春巻き？」

「揚げ立てなんでご注意を」

ご主人様は熱々の春巻きを摘み、サクッと噛む。

「ナニコレ美味ああい！……中身がバナナ、だっ！」

「揚げバナナです。衣溶くの面倒なんで春巻きの皮で代用しました」

「バナナを揚げてるのか」

「タイの名物の一つだそうです。次はクレープの皮で丸ごと揚げてみようと思います」

そんな時、そうっ、とA子の背後から揚げバナナの一つを摘んだ主が。

「B子、またお前か！」

「頂きまーす」

B子はそれを口に頬張った。

「——熱いいっ！」

「あ、やっぱり猫舌なのか」

## 第142話

---

ご主人様は、A子が居間に置いたネットブックの前で固まっている事に気づき、声を掛けた。

「どうした？」

「256発で壊れるのってこれでしたっけ、ああ違う、そうじゃない」

「何を見て……」

そしてご主人様も固まった。

<http://wiredvision.jp/news/201010/2010102118.html>

「……世界は広いなあ」

「はい」

## 第143話

---

「ご主人様、とうとうXPへのダウングレード権付きPCの販売が終了したようですね」

「あれ、じゃあもうXPは使えなくなるの？」

「いえ、XP自体は2014年4月8日までサポートされます」

「ふーん。でもそろそろwindows7にアップデートしなきゃならないかな」

「あれ？ まだXP使ってるんですか？」

「ビスタの時の悪評で面倒になってなあ。

しかし既に2世代目になってるのにまだ現役って、やっぱりXP凄いわ」

「でもそろそろ厳しいのでは」

「いやあ、厳しいと言われても実感無いんだよな」

「メモリの上限や最新CPUやGPUをフルに活かさないデメリットは大きいですよ」

「そんなもんかなあ」

「ハードの性能は向上しているのにOSが足を引っ張っている訳です。

7が普及すればもっとその違いが目に見えるようになるでしょう。

いつまでも古いOSに固執しては駄目です」

「ふーん。ところでA子の部屋にPC-9821が転がっていたけどあれは」

「DOSのエロゲーをする為です」

「おいおい」



「ご主人様ーあ、炬燵出そー、炬燵ー」

居間で寛いでいたご主人様は、背後からB子に甘い声で抱きつかれた。

「藪から棒に…」

「だって寒いじゃないですかあ。10月なのに北海道で雪降るなんてありえない」

「異常気象って言ってたなあ。でもなあ」

「？」

「うちに炬燵は無い」

「マジで！？」

「ありえない！ 炬燵が無いなんて、人間の住む家じゃない！」

「何を言ってやがりますかこのバカ」

いつの間にかやってきたA子が呆れ顔で言う。

「ここはエアコン完備だから、炬燵が無くても暖かいの」

「エアコンなんて風情が無い！ 日本人の家なら炬燵こそ完備して当たり前！

無いなら買いましょう！」

「買う、って言ったってなあ……」

「何も掘り炬燵を要求している訳じゃありません！

普通の炬燵で充分です！暖とともに風情も買うのです！」

「あんた私に節約要求していた癖に余計なモノ買わず気？」

「ねえ……良いでしょお？」

B子のご主人様に胸を押しつけておねだりする。

「おk」

「マテやこのおっぱい星人」

B子に色仕掛けでねだられ、ご主人様は仕方なく炬燵を買う事になった。

「……動機は兎も角」

A子は呆れつつ、

「確かにエアコンよりは省エネになると思います。  
今年の猛暑で電気料金が結構バカになりませんでしたから、  
冬は工夫してみると良いかもしれません」

「確かに、炬燵で鍋をつつくのは風情があるしなあ」

3人は近所のショッピングモールの家電コーナーで炬燵を物色していた。  
手ごろな価格で家具調炬燵が売られており、  
三人で足を伸ばしても余裕の大きいサイズもあった。  
そのうち、B子が不思議そうな顔で炬燵をじっと見つめた。

「どうした？」

「.....赤外線管が無い」

「そう言えば」

「今の炬燵はヒーター管式ですよ」

するとB子が嫌そうな顔で二人をみて、

「炬燵と言ったらあの赤外線でしょ！」

B子が力説し始める。

「あの安っぽそうな真っ赤な光のポカポカさが堪らないんですよ！  
炬燵の中で丸まって真っ赤になってる楽しさと来たらもう！」

「お前は猫か……」

「あー」

仰ぐご主人様。A子はB子が猫又だという事をまだ知らなかった。

「と言っても、どれもこれもヒーター管式だなあ」

「赤外線式は消費電力高くありません？」

「いやいや、赤外線式こそが炬燵の醍醐味であって！

無いなら他を当たりましょう！そうだ、秋葉原行きましょ、秋葉原！」

「秋葉原って今、炬燵売ってたか？」

「フィギュアやゲームしか記憶に……」

「行くったら行くの！」



ご主人様たちは赤外線式電気炬燵を求めて秋葉原を訪れた。

改札を出ると、B子が愕然とした顔で辺りを見回す。

「どうした？」

「ココハドコデスカ」

「何故口ボ語。どこから見ても秋葉原じゃない」

「嘘」

「嘘じゃ……」

「秋葉原と言ったら闇市で牛がリアカーひっぱってるでしょ！」

「「そっちかいっ！」」



「秋葉原なのに神田市場が無いじゃない！

あの薄汚いラーメン屋のいすゞも無いなんて！

サトームセン、ロケットはどこ行ったの！？」

「……ご主人様」

「何」

「このバカ、私より若く見えるのに、私より年上の様に感じるんですが」

「いや、どう見てもA子のほうが小学……」

言い切る前にA子のご主人様の足を蹴った。

「私の記憶でも極端に変わってますねこの街」

「俺が最初にこの秋葉原に来たのは小学生の頃だが、  
確かに代名詞の“電気街”だったんだがなあ」

「今じゃすっかり“オタク街”ですよね。

私は“電気街”の頃なんて全然知りません」

「何あの高層ビル！ 秋葉原デパートはどこ行った！？」

「「まだ言ってる……」」

「さて、どこで買うか」

「ヨドバシも新しいのしかなさそうですから、中央通りを当たりにしょう」

「どんな店があったっけ」

「とりあえずソフマップとか」

「そふまっぷうう？」

「B子、何その嫌そうな顔」

「レンタルソフト屋で売ってる訳無いじゃない  
ですか！」

「「れ...レンタル...ソフト...屋.....だと？」」

「A子……何、そのレンタルソフト屋って」

訊かれてA子は暫し仰ぎ、

「……確か、ソフマップはゲームのレンタル商売から始まったと聞いたコトが」

「他にもマックスロードとかあったじゃん！」

「マックスロードって少し前に店畳んだ中古屋じゃ…」

流石のA子もやや混乱気味である。

「いやぁ、秋葉原にはそんなヤバイ商売の店はもう無いなぁ」

「でもソフマップの看板があるじゃないですか！

ていうか何あのデカイ建物！」

「今のソフマップは、新品中古のゲームやパソコンを扱ってて、  
ビックカメラの傘下に入ってから家電も扱うようになったの。

アンタの知識って一体いつの話よ？」

「いつ、って……」

B子は暫し仰ぎ、

「……えっと、昭和何年だっけ、今？」

「もうやだこの娘」

A子がさじを投げた。

「一体アンタどの時空からやってきた時をかける少女よ！

今は平成！ どんだけ時間止まってるのよ！」

その隣でご主人様が暫し傾げ、そして何故かA子に質問する、

「なあ、A子って、ご両親より、お爺さんと趣味とか気が合ってたか？」

「……え？ どうしてその事を？」

「成る程」

一人うなずくご主人様は、B子はA子の祖父が拾ってきた事を思い出した。

(..... B子、お前さんA子のお爺さんと昔ここに来ていたろ)

(あはは.....)

ご主人様の心の声のツッコミにB子は苦笑いする。

(我が主が元気な時に、ジャンク屋巡りで付き添った頃しか知らないのよお.....)

(それは流石に古すぎるわ)

「ご主人様、何でお祖父様の事をご存じで？」

A子が不思議そうに訊く。

「いや、会った事も無い」

ご主人様は仰ぎ見、

「B子がお爺さんと知り合いだと聞いてて、今の話で、似た趣味を持っているのかな、と」

「……へ？」

A子は困惑した。

「あの。言ってる意味がよく判らないんですが」

しかしご主人様は無視した。

釈然としないA子を後ろに、ご主人様とB子はさっさと中央通りへ歩き出した。  
A子も慌ててその後を追う。

「……何か家電屋が見あたらないんですが」

B子が中央通りをキョロキョロ見回す。

「この十年間で、家電屋は中央通りからすっかり無くなったからなあ」

「ナカウラのアンコウの看板も無いなんて……」

「あ」

不意に、B子が前を指した。

「ラジオデパートがある」

「何かテスターとか半導体とか売ってる店が沢山入ってる雑居ビルだっけ。

一番上でビデオケーブルが安く売られているから、時々買いに行ってる」

「私の最後の記憶でも、メモリとかしーぴーゆーとか売ってました」

「流石に炬燵は売ってないけどな」

「ていうか」

B子は指先を右に少しずらし、

「でかいゲーセンがある……ここ、シントク電気があったはず」

「流石に記憶にないなあ」

「その隣にヒロセムセンが……あれ、またゲーセンだ。

何か私の記憶にある家電屋が皆、ゲーセンになってる」

「今の二つは20年ほど前に倒産してるわよ」

追いついたA子が答えた。

「私らがネット使ってやってやっと分かる様な話を何故、あんたが知ってるのよ」

もっともだ、とご主人様は心の中でうなずいた。

(しかし、このままだと、ややこしい説明をしなければならないな)

(ふええ、ご主人様、へるぷうう～)

(情けない化け猫だなオイ。じゃあ……こう试试看)

(了解いい)

「じ、じつわですねえ」

B子はA子に、子供の頃身体が弱く、遠縁のA子の祖父の懇意で、山奥の医療施設で暮らしてて世間と隔絶していた事や、手紙でやりとりしていたA子の祖父から聞かされた古い話しか知らなかった、と身振り手振りも交えて、もっともらしく説明してみせた。

「へえ。そうだったの。なら納得」

B子とご主人様はこっそり胸をなで下ろした。

「でも、まるで実際に目にした様な知識の様な気もするけど」

「「ハハハ、キノセイデスヨー」」

「何で、ご主人様ままで」

「さて、僅かに残っている家電屋と言えば石丸電気だったかなあ？」

「石丸？石丸電気は残ってるんですか！」

B子は思わず目を輝かせた。

「あのエスカレーターのCMってまだやってるんでしょうかね！」

「エスカレーター…」

「昔見た事あります。歌をBGMに家族連れが店内を回るCMよね」

「そうそう、それ！」

「でも、もう石丸電気は、少し前に業績不振から後発の家電量販店の傘下になって、そのCMは流れなくなったわ」

「がーん」

「……この街から昭和の匂いが次々と消えているなんて……

ああ、よく見たら横にロケットのビルがあったのに何か更地になってて、  
美味しそうな匂いの屋台村に変わってる」

「なんか、コールドスリープから目覚めた昭和の人と話しているSFみたいで楽しい  
んですけどこの娘」

「あはは……」

ご主人様は苦笑い。



「ご主人様、百円均一って詐欺ですよ」

「何いきなり。秋葉原編は？」

「いーんだよ細けエ事は(ry」

「しかし何故詐欺呼ばわり？」

「百円均一って百円玉じゃモノ買えませんよね。消費税分5円足りません」

「確かに。正確には百五円均一だな」

「だから詐欺です」

「ちょっと言いすぎの様な気もするが……」

「しかしどうして、ひと品ピッタリ百円玉で買える百円均一って何故無いんでしょう」

「税抜きで、百円以内にコスト抑えるのだけでも相当苦労しているとは思うけどなあ」

「企業努力が足りないんです。世の中には99円均一な店もあるんですよ」

「1円しか違わんし、それでも百円玉じゃ足りないじゃないか」

「仮に百円玉で買えるとして、税抜きの本価は幾らぐらいでしょうか」

「100割る1.05だから、95円。

95円掛ける1.05だと、99円余り75」

「ご主人様、暗算得意ですね」

「そろばん3級だぞ」

「何その微妙な級」

「進級試験の日に風邪引いて取れなかったんだよ。シナ事どーでもいいわ」

「でも25銭余分を取られるのはちょっと大きいですよ」

「じゃあ、96円だと……100円余り8」

「8銭でも積もり積もると店側も損になりそう」

「それくらいだったら切り捨てられると思うな、……4円差かあ」

「4円下げるにはどんな方法がありますかね？」

「品を入れる袋を廃止するとか」

「でも沢山買う人にはそれは辛いのでは」

「そこはサービスですよ。レジ袋の価格は、と」

A子はPCで検索し始める。

「..... 1袋あたり2円前後」

「無料みたいなモノだと思っていたけど、店側には結構バカにならないな」

「沢山買ってくれる人向けのサービスですね」

「買う側にはいくらで元が取れるかな」

「整理しましょう。」

「店側の値段は96円だと8銭の損、95円だと25銭客の損」

「客がレジ袋で元取るには4つ品を買えばいいのか」

「いえ、4つだと380円に1.05掛けるので399円丁度。1円の損です」

「あれ？じゃあいくつで元が……」

「ややこしいのでメモ帳に書いて整理してみましょう」

A 子はメモ帳に計算式を書き始める。

「百円の内訳が、単価と消費税とレジ袋代の一部として、  
単価が 95 円、消費税はそれの 5% だから 4 円端数切り捨てで……」

「そうか、25 銭じゃなくて端数の 75 銭が問題か。

75 銭と 2 円の最小公倍数を出せば良いのか」

「0.75 と 2 の倍数ですか……えーと」

「6、ですね」

「すると、95円の品を6個買うと570円。

消費税を加算すると598円。

6個だから600円、その差は2円、おー、レジ袋代になった」

「……あれ、待って。それだとレジ袋代も客が出す事になりますね」

「あ」

ご主人様は思わず仰いだ。

「……もう何がなにやら」

「……税別百円でいいです、もう」



第6巻へ続く

画像素材は一部以下のサイトより規定の下、引用、加工しております。

- ・ 無料街写真素材 東京デート

<http://www.tokyo-date.net/>

- ・ EyesPic - フリー画像素材

<http://eyes-art.com/pic/>